



けがを乗り越え、夢の舞台へ

あきと
市橋 昂士さん

第104回全国高等学校野球選手権大会で甲子園の土を踏み、副キャプテンとしてチームを41年ぶりのベスト8へ導いた市出身の市橋昂士さん。「あの観衆の中でプレーできたことは、最高の経験でした」と振り返ります。

小学生の時、7歳上の兄の影響で野球を始め、中学では、甲子園を目指す実力をつけるため、クラブチームに所属する選択をします。「お茶当番や送迎などの負担があるにもかかわらず、クラブチームで野球をさせてくれた両親には感謝しています」と話す市橋さんは家族に支えられ、野球の名門・愛工大名電高校へ進学します。

1年生の秋からレギュラーに抜きされ、順調に夢への階段を上っていた矢先に腰椎分離症を発症し、全治3カ月の診断を受けます。「野球をやめるか迷うくらいモチベーションが下がっていました」と、どん底の状況にあった市橋さんを救ったのは先輩からの励ましという言葉でした。その言葉を胸に練習できなかつた分を取り返すため、自主練習にも一層取り組んだ結果、夏の大会のベンチ入りメンバーに選ばれます。その後、チームは夏の甲子園出場を果たし、市橋さんは代打で出場し、安打を放ちますが、一回戦で敗れます。2年生の秋からは副キャプテンに就

任し、「個性の強い代で大変でしたが、チームのことだけを考えて行動しました」とチームを引っ張り、昨年以上の成績を目標に掲げ、練習に励みます。2年連続甲子園出場が懸かるプレッシャーから「一番ハードでした」と話す県大会決勝、東邦高校相手に市橋さんは2安打を放ち、チームは甲子園への切符を手に入れます。「東邦に勝ち切ったことが、甲子園で戦っていく自信につながりました」と甲子園では4割を超える打率と持ち味の守備・走塁でベスト8進出に貢献します。準々決勝では、この大会で優勝する仙台育英高校に惜しくも敗れましたが、「相手が一枚上でした。悔いはありません」と高校野球に終符を打った市橋さん。

春からは、関西の名門・龍谷大学へ進み、活躍の場を大学野球へと移します。大学では、「関西の別の大学へ進むチームメイトと切磋琢磨して、いつかは明治神宮大会を懸けて戦いたいです」と意気込みます。けがを乗り越え、甲子園を経験して大きく成長した市橋さんは、大学でも白球を追い続けます。



▲甲子園で躍動する市橋さん

cover

二ツ池公園で咲く満開の河津桜の下で、新1年生になる女の子2人をモデルに撮影しました。小学校への入学の門出を祝うかのようなピンク色の桜に包まれ、ピカピカのランドセルを身に着けた子どもたちはとてもかわいく、すてきでした。

